宗像

毎月一日発行
定価 一年 送共250円
発行所
宗像大社社務所
福岡県宗像郡玄海町田島
電話 神湊 26の甲

年頭の御挨拶

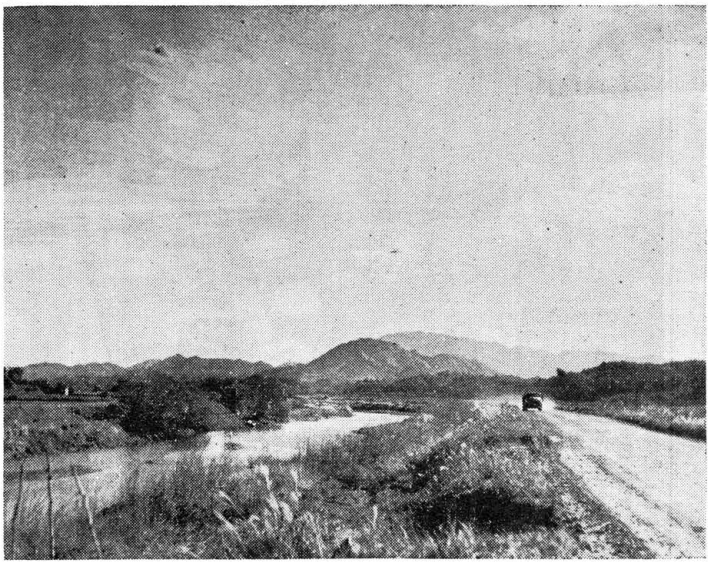
同郷の皆様。明けましておめでとう御座います。新年を迎うるに当り御一同の御繁栄御多幸をお祈り申し上げます。又昨年中郷土のためにおつくし下さいました多大の御配慮御苦労に対し衷心感謝御礼申し上げます。さて、一休禅師は「元日は冥土の旅の一里塚めでたくもありめでたくもなし」と、凡庸の私には理屈はいかようにあろうとも、元旦は本当にめでたい。年毎に一年一年冥土に近づくということは、数えて八十を超えた老人には問題ではありませぬ。たゞどうして冥土にいくかということが問題であります。

孔子がその弟子の子路に「老人に対しては、安心して死ねるようにしてやることが人の道である」と説いているように、安心して死ねることが、冥土へいく老人の第一の希望であり、最後の悲願でもあります。国家が本当に信頼の置ける立派なものとなり、郷土が美しいムードに包まれ、その人々が安楽に現世の旅を力強く歩くようになっているならば、後顧の不安は微塵もなく絶対に安心して極楽にいけるのであります。かくお願いする老人は勿論その安心を得ることについての老人の役目を十二分に果たせねばならぬのであります。さしあたり正しい国民としての心、人間としての真の道を、日々の生活の中で、具体的に意識的でなく自然の形で子や孫に伝えるのは老人の隠れたる大切な仕事であり、安心を得る役割の一端でもあります。こういう老人の役目の一端について年頭の所感を附記しておきました。

年頭所感

○年老いて他郷に住めど古里の弥栄祈る初日仰ぎて
○ちりの世のにごりにそめる人々の心を洗ふ心学池水
○千早ふる神の心にかようこそ加護をさづかる基なりけり

八十叟　仰陽



新風景　釣川の春　（山斐は許うた向）

宗像大社御用達
祭神装束具
松島神輿製作所
京都市下京区北小路通新町西入
電話 (37) 八八六九番
振替口座京都一五八九一番

迎春所感

輝かしき新年、昭和三十七年を迎え郡民の皆様と共にこの慶びをわかち合い併而御健康と弥栄をお祈り致します。

偖郡民の機関紙「宗像」が発刊になって何十年郡民の一人として洵に物淋しい思いがして居りましたが昨年宗像大社関係の各位の御苦心の結果再び月刊「宗像」が刊行されるようになりました事は衷心より深甚なる感謝と敬意を表するものであります。今後この「宗像」が愈々発展拡大されるよう切に希望する次第であります。

つきましては新春に際し一言御挨拶申上げますが宗像の住民として吾が郷土を見ます時昨今の情勢は誠に頼もしき限りであります。北九州工業地帯と福岡市の中間に位し双方よりの潮の如き伸展の波は今や一大森林都市を形成しつゝあります。

古来宗像民族は宗像大社を中心にもとく憂放闊達、進取の気性に富み幾多の功績を重ねて来た事は既に皆さんも熟知の通りであります。

神を敬い祖先を崇める清らかな心この心の集りこそ吾が宗像人の誇りであり伝統であります。

社会情勢のおもむく所まだ〳〵宗像は発展の気運に充ちく〳〵居りますが、不屈の精神と人の和による宗像精神によって郷土宗像の繁栄がいやが上にも飛躍する事を願い年頭の所感に替える次第であります。

玄海町長　高橋盛平

宗像大社 水銀（常夜）灯建立趣意書

当宮に於きましては最近参拝者の激増に伴い、社頭の整備計画の一端として水銀常夜灯を設置いたすことになりました。戦後世情民心の正常化と共にわが宗像大社の御神徳もいよいよ御発揚あらせられる時機と相成り、当宮の存在も漸く人心の拠り所となって来つつあります。この時にあたり更に新時代の風潮を啓発し、敬神崇祖互讓互助の宗像精神を喚起するために御社頭の整備にとりかからんとするものであります。

日夜宗像大社を敬仰して郷土宗像に限りなき親愛の情を寄いておられる皆さん、皆さんのまごころからなる希望の光を御社頭にかかげて下さい。

今この趣意書をしるすにあたって、謹しみて神前にひざまづいての事業の順調なる達成のため、神明の御加護を請い奉るや切なるものがあります。

ここに篤志家各位の御理解と御協力を御願い申し上げ、やがて協賛の浄財が社頭の光明となって輝やく日を想う時、限りなき感慨に胸さわぎを禁じません。

こいねがわくば、この趣意に多大の御協賛を賜らんことを。

昭和三十七年正月吉辰
宗像大社社務本局

正月を期して宗像大社社前の翠に常夜灯をつけたいという意見が出て、いよいよ実行にとりかかることになりました。ただ今各地に連絡して折衝中ですがほゞ見通しがつきそうなことになっております。何れ趣意書を配布の上直接お願いいたすつもりでございますが、一応右の趣意を御覧下さいまして御賛同賜りたくお願い申し上げる次第でございます。

詳細は編輯部までお申越し下されば水銀灯設置係より委しく御説明申し上げます。

防犯表彰

郡中学校生活指導者協議会

最近の青少年の非行は目に余るものがある。国家民族の前途のため、これを何とかしなくてはならぬという声が高くなっている折柄、この度宗像郡の防犯団体が表彰された。純朴正直勤勉をモットーとする宗像郡であればこそこの栄誉があったといえよう。

しかしこの防犯団体でさらも、発足以来十年を経て始めてこの時れの日を迎えたことと、現在の世情を思い合わせると、一方防犯運動の至難なことを思わせるものがある。左にその全文をかかげる。

表彰状

宗像郡中学校生活指導者協議会（会長肥屋崎中学江口航三校長）

会員一同協力して防犯思想の普及につとめられると共に防犯活動を指導され或いは青少年非行防止に尽力せられた功績は特に顕著でありますのでここに記念品を贈って表彰します

昭和三十六年十二月四日
社団法人
福岡県防犯協会
連合会長　鵜崎多一

論説　余生一年

勝浦　永島計七

○人生の為すべきことを今日終へて次の世代へ旅立ちをせん
○老いぬれば我は急が移りゆく世の渦巻を見つゝ歩かん

この拙作二首は、先年急病で倒れすでに人生の終焉を覚悟していた私が世の人の情によって奇しくも再生したが、もはや物の用にたつべくもないと悟り、勤続五十年の公職生活にお暇して余生活に入らんとするときの述懐である。

この述懐と生活の構想に基づいて昨年一月から新たな世代を、余生の旅へ悠々歩を進め、新年早々には『新年を迎えて七十三才、人事を尽し得て心境朗か、人生五十とは抑々誰が言そ、我に余生あり尚なお徒に余生を楽しむなとは怯懦者だ、まだ時代を識別し得る能力しきものを高吟しつつ静かな新春の海岸を散歩していた私であった。その私が見つつ歩きたいと念願していた世の渦巻に次第に足を踏み入れようとするかに見えると、近親の者が心配しはじめた。

『もうお前の時代は過ぎている。年寄の冷水は止したがよい』などの注意も耳に入った。

しかし一方には世に生あるものは抑々誰が言そ、我に余生あり尚なお徒に余生を楽しむなとは怯懦者だ、まだ時代を識別し得る能力が、この国の動揺期に世捨人の如く、社会に尽すに足る力が残っている『息のあるうちは働け！立て！』と激励する知友がある。その声を聞くに及んで、学校教育、社会教育、自治行政と前年まで歩き続けて来た私の心に響くものがあった。特に最近の教育界の現状を見るとき忍び難い数々のものがある。

三年前の勤評斗争には身を以てこれが善処に当り考えさせられるものがあったのに、その後も道徳教育反対、新教育課程講習会反対と、文部省や県教委が計画し実施せんとする事項に対しては悉くといってよい程反対する。社会風潮に目をかさず、たゞ組織の中にある自分達だけとして、今回の学力テストにも盲目的に反対する教師達（全部ではない）の気が知れない。文部省のやることは教育の国家統制を狙うものだ、戦争へ導入の予備工作だ、教委が何だ、校長が何だ、父母の考えも亦これを無視して、子供の教育は自分勝手な解釈で一方的に進めて行こうとする。これに対し私は正常な教師の多くを知っている。これにのぞみをつないで、我国の教育が一日も早く正常な姿に立ち直り、真に民族の繁栄国家社会の振興に大きな力となるよう祈りつつ同志に呼びかけ、世の渦巻は混乱斗争の渦巻でなく生成発展進化の渦巻であるよう、私は傍観者の立場を捨て微力を捧げて来たつもりである。

かくして余生一年を送った私は、新しい気分でその二年目を歩こうとしている。（前肥屋崎町長）

阿蒙少言

会報の原稿が意の如く得られないと嘆く編集者に同情して、勝手な感想の片々を紙面の穴埋めにして十二回、まさに出来のよくない少言だがやめろとのお叱りもないからには続けねばなるまい、末輩の暴言にお気づきの時はお赦しを乞う★若い母親言う、隣の坊やはお利巧だからママと呼ぶでしょうママと言いなさい、坊や言う、お父さんをパパと呼んだら煙草の吸殻のような呼び方はいけないと、パパでもママでも結構だが両親の好みがちがっては子供も迷惑、ママなる如世の中★子供に叱言をいわず放任すれば理解のある親だと賞める、賞められないでも我侭者に育てるのは落物だ、子供が成長するにつれて物心両面の親父の重荷はふえてゆく、良き親父はまた良き教育者でなければならないのだが、これは難しい★或る職域の老体から後継者について意見を求められた、長い間あなたの下で忠実に勤めて来た某氏が適任でありこれにあなたの令息の将来を托するが順当と思うと答えた、他人よりわが子の可愛いことは当然だが私情にひかれてわが子だけを幸にする手は逆に不幸に落すことになる、先ず他人の幸を考えることだ★火中の栗を拾う者を浅智短慮の標本とするが稀に拾って食ってみれば良い味の場合もある、石橋をたたいて渡る者を熟慮分別の器量人とするが世の中には石橋をたたき過ぎてたたき落し遂に渡れなくなる場合もある★東京で年中裸体で通し笑いの生活を旗印に人生を明るく説く指導者に会った、この出を噛みつぶした顔はよくない、笑いがよい、然し笑えば威厳を損ずると心得る人もある、笑ってさげる男ぶりなら元来が値打の如き下等品だ、験咀な人生行路だ、大いに笑おう。（白雲）

第九回宗像大社献詠歌会詠草

36・12・3於社務所（詠草到着順）

沖島　前田喬之助
しづかなる神津御島もこのごろは避難港工事の音に賑はふ

熊本　吉田　寧雄
神の道ひろむるつとめ負ふわれにふさはしき御歌賜はりにけり

津屋崎　麦野　時雄
午後三時銭湯に来る顔なじみ老の心を語らひなごむ

香椎　織田　橡雨
秋ごゝにありとも愛づる山柿のしぶきうき世を日曇の里

勝浦　永島　八重
つげの小櫛用なきまでに老いにけりかしらの霜はおくにまかせて

宮田　片山　一
日もすがら稲刈りたればくれなづむ雨の雲のながくかがよふ

田島　滝口主米蔵
孔大寺の山ふところにもえたちて一もと高きはぜのもみぢ葉

宮田　片山　朔子
大方は刈りとられたる山峡の田に子供等がボール投げする

吉武　福原　正喜
栗落葉重なり濡る谷畑に野鼠のつぶらな目が光りたり

吉武　立石　昇
秋の陽が家の奥まで射し入りて机上に匂ふパラの一輪

勝浦　永島　文子
小麦蒔く高原の畑にもす鳴きて漁村の秋はしづもりてゆく

田島　宇都宮　睜
西海のみどりを散らす島々の雨の翌に鐘なりわたる

福岡　林　まつえ
刈干しの嫁うつくしく並ぶ丘越えまた越えて日向路を行く

戸畑　伊規須ゆき
屋島の浦牡蛎の施設を見つつ亡びしものに心ひかれき

吉武　立石ろせ
庭隅に吹きたまりたる落葉掃けば蝉の殷け殷一つまじれる

香椎　桜井　秀
玻璃透す陽恋うしくて俗る寂を秋しめやかに沈む街路樹

香椎　桜井　ツ子
立冬の陽かげきわやかに枇杷に射し吾は眼に見えぬ物質に怯ゆる

吉武　原田　リノ
三十余年稲刈り来りまだ老いず健やけき影を引きて働く

内浦　長畑　房江
新しき毛布を買ひて来む冬を待つ如くなる我が心かも

宗像　中村　幸
石庭のところどころに咲き盛るつはぶきの黄に和む日の暮

深田　中野　節子
冬ごもる愛鳥の風よけ今終へて尿槽の袋めだつ一隅

勝浦　永島　計七
何処にて遊びしものか帰り来し孫の頬辺の汚れおかしき

戸畑　花田　道子
唐突に吉弔啼きわたる暁の庭は時雨れてバラの花散る

宮田　北原キミ子
今日一日塩湯にあそぶ女らが砂灼くる浜かけ行くが見ゆ

戸畑　田中はつせ
走り行く窓ごしに見る川の洲のいづこに出来しか子等のみやげに

田島　久保　輝雄
許嫁山太力風荒れし日は遠くまらを眠る峯しづかなり

田島　葦津　嘉之
おさなごらしひの実にぎりあそびに来てあめちょうだいといふが愛しさ

田島　小野　迪夫
楢の枯葉輝やきよく朝にしてわが生きてありといくたび思ひし

神湊　隣船　俊
御星居は熟れ多くも戦災の御苑に残る鵬躍の岩

田島　神戸　幸夫
むれなして渡るを見ればまた鴨にも掟あるらし列はみだれず

戸畑　山磨　昌子
見事さにそっとふれみる出品の紅あざやかな菊の大輪

賀春
宗像大社
宮司　久保輝雄
外職員一同

機関紙『宗像』編輯部一同

宗像大社古式祭御座

午前六時、暁闇の冥気を破って太鼓の音が響く。拝殿にがては宮司以下全職員の奉仕によって古式祭が奉仕される。神饌は七百年の伝統を持つ「霧餅」「九年母」「ケバサモ」等が古式通の捧げられる。終って渭朋殿に於て郡内各地から馳けつけた人々によって「お座」が開かれる。「公事根源」にも見える有名なお座である。

新雑に居並んだ人々の胸には一年中の労苦がかえり見られ、今ここに神人相響（一緒に食事をする）をする感激が一杯となっている。宗像の古式お座は単なる縁起かつぎや商売繁昌のための集会ではない。昆穂（神聖のしるし）の刺し立てられた御飯や熊下神饌を少しずつ分けてつけられたおかずがそれを物語っている。

えーい　シャンく
も一つ　シャンく
ようでさんごうシャンく
シャンくシャン
おめでとうございます。
――――めでたい手じめの囃しがひびく。

正月祭事表

元旦祭　一日午前四時年頭にあたり一年中の福徳を願う。国家隆昌、交通安全、産業文化振興、農漁業繁栄祈願祭を斎行。

恵比須祭　十日午前九時商工会主催の十日エビス祭、境内蛭子社に於て商売繁昌を祈願。終ってお座を催す。

献米奉告祭と鏡餅開き　十三日　午前十一時旧年中に配布した献米袋によって奉納された献米を前に報告する。合せて正月鏡餅開きをして生産感謝と今年の予祝をする。

成人祭　十五日午前九時成人報告祭。公民の自覚を誓う

宗像　談話室　ことわり文句

近頃は少くなって来たが、それでも度々やって来る。例の豆新聞の連中である。以前は相応の〝賛助金〟を出していたらしい。事実それで結構生活していたものもあったように聞いている。

ところが「宗像」を発行するようになってからは途端にシブくなってしまった。ことわり文句を覚えたからである。

先んずれば人を制す、という。剣道と云う「先を取る」というやつである。誰かが来る。物々しいスタイルで〆何々新聞社長なんのなにがし〟という名刺を出して面接を求める。手には大分以前に発行されて黄色くなった「豆新聞」を持っている。

「よくいらっしゃいました。ご苦労さまですね」

大低編輯部の者が応接に出る。始めはインギンそのものである。

そこでテキは相好を崩して喜ぶ。ますますお茶でも、と向が一寸気の緩んだ所でじわあっとちらが話し出す。

「新聞のお仕事は大変でしょうな、殊に社長さんおん自ら取材活動をなさるとはまた随分お忙しいことですね。ここでも新聞のようなものを発行していますから、その辺のところがよく分かりますよ。」

「ほう、お宮で新聞を出しておらるるとですか」

「はあ、いや大したものではありませんがね、これですよ」

ここで部厚い「宗像」の綴りを出して来て見せる。

向うさんがパラパラとめくって見ているうちにこちらはしゃべり続ける。

「郡出身の人が日本全国に進出していますよ。費用は全部神社で負担しますよ。費助金？とんでもない、そんなものを貰って発行しているんじゃありませんよ。」と角宗像月刊で発行していますが、とても喜ばれていますよ。購読料？いやそんなケチな考えなどありませんよ。費用は全部神社で負担している。合せて郡内唯一の第三種郵便物ですからね、一応表示して置かなければならんですからね。已むを得ず書いてあるわけですよ。

えっ、それにしても写真や凸版の数が多いから費用が大変だろう？いやいや、当社には郡内でも一寸無いくらいの写真機と暗室がありますからね。写真ばかりじゃなく、会員の皆さんに喜んで貰えたらそれでいいんですよ。郡の総鎮守であるこのお宮が宗像郡人に喜んで貰う為のほんのささやかな奉仕と思えばこの新聞の経費くらい安いものですよ。尤も経理部からは予算を倍以上も使って困る、と文句出ていますがね。えっ、購読料「宗像」は今や全国の神社刊行物一年送料共三百五十円と書いてあるの？それはですね、うちの新聞は少くとも郡内唯一の第三種郵便物ですからね、一応表示して置かなければならんですからね。已むを得ず書いてあるわけですよ。

えっ、それにしても写真や凸版の数が多いから費用が大変だろう？いやいや、当社には郡内でも一寸無いくらいの写真機と暗室がありますからね。写真ばかりじゃなく、ここのお宮はね、いまも申し上げたように野武士の集団みたいなものですよ。尤も経理部からは予算を倍以上も使って困る、と文句出ていますがね。えっ、購読料「宗像」は今や全国の神社刊行物一年送料共三百五十円と書いてあるの？それはですね、うちの新聞は少くとも郡内唯一の第三種郵便物ですからね、一応表示して置かなければならんですからね。已むを得ず書いてあるわけですよ。

えっ、それにしても写真や凸版の数が多いから費用が大変だろう？いやいや、当社には郡内でも一寸無いくらいの写真機と暗室がありますからね。写真ばかりじゃなく、絵描きも電気屋も水道屋も測量屋もあるまい、などという者もあって、里人たちは彼等の敬慕する大殿の御屢事をわがことのように喜び合っているのである。

×　×

話は一年前にさかのぼる。というのは、去年の放生会の時に、隣関紙としてこれを発行している訳でもあるこの宮は宗像郡人の心のふるさと、特に郷他に出ている人たちにとっては懐しいあこがれのシンボルとでも申しましょうか、そういったことで一年前からッフで間に合っていますよ。いまこれに相応しくなっている。

これだけしゃべられてはたまらない。向うはロクに向うの用事もいわず「おみそれしました」とか何とかいってすぐさと帰って行けしますがね」

宗像大社宝物紹介

今回は鞍を紹介します。

一、鋳鉄製覆輪と磯金具

鞍の部分でひどく破損していたが、接合されたので覆輪の一部と磯金具の半面が知られた。

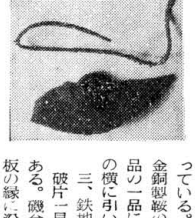
全体の大きさは知り難い。磯金具と覆輪との間にあるべき海の部分は木質でもあったのか全く見ることができない。

磯金具は厚さ三―四粍の鉄板で、海との境に当る上縁に数個の鋲で留められた鉄製縁金具を付けている。また平たい座金をつけた鞍が左右に各一個装着されている。

磯金具の両端の開きは約四〇糎、高さ一九糎位で、海挟みの間隔は一・七糎、高さは二糎で磯金具の左上面に布片の銹着が見られる。

二、金銅製縁金具及び金銅製鞍

現在二折していて中間と方の端を欠失している。



屈曲して何れの部分に着装したものか推定困難である。

これに相応する金銅製鞍も採集されて居る。

底径四・六糎の鍍頭形座金物を持ち、鞍具の先端が一方に曲っている。

金銅製鞍の鞍具基部内側に、両品の一品には一条、一品には二条の筋に引いた刻目がある。

三、鉄地金象嵌鞍

破片一具分。覆輪と磯金具がある。磯金具は厚さ約四粍の鉄板の縁に沿って銀箔文状の金象嵌と、一線で画した内部に流水文状の金象嵌が見られる。

覆輪片は断面がすべて「コ」の字状の海挟みになっている。

曲折部の上端が約二糎、高さも二糎で流水文の金象嵌が見られる。

宗像大社

社務日誌抄

十一月十一日　出光興産徳山製油所社員十八名来社

十一月十二日　出光泰亮氏来社

十一月十五日　月次祭、高宮祭午前九時、本社十時斎行、評議員会午前十一時社務所にて開催。

十一月廿三日　生産感謝祭、高宮祭午前九時、本社十時斎行、評議員会午前十一時社務所にて開催。

十一月廿五日　三重県神社庁長林栄治氏外一名来社。

十一月一日　月次祭、高宮祭午前九時、総社祭午前十時斎行。

十一月十五日　大麻頒布式斎行。

十一月十四日　京都八坂神社権宮司鈴木氏来社。

十一月十五日　古式祭午前六時、鎮火祭午前九時、高宮祭午前十時斎行。続いて宮司、禰宜上京。

十一月十七日　買収田打合せの為宮武磯市郎氏来社。

十一月十九日　松尾神社祭斎行、北筑杜氏組合員二十名来社。

十一月十七日　筑紫豊、大田静六、加藤謙氏、阿弥陀経石調査の為来社

十一月十八日　出光興産タンカー起工式、佐世保にて斎行。

参拝

大島敬神婦人部で、部の事業として新春を期して「子安講」を発会することになった。

これは子安神として全国の崇敬をあつめている中津宮さまのお膝元に、子供の安産と無事成育を願う家庭婦人の幸情を結集しようというものである。

旧年中数回の会合を重ねて討議した結果、大島全島に趣意書を配布して極力参加を求めることになったもので、全島が六地区になっているので毎月恒例の祈願祭には交替で参列することにした。そして一年に二回位（五月五日乃至は十一月十五日等）大祭を行う。例月の祈願祭にはなるべく関係当事者が集って参詣をする。経費は不要。社務所からは祈願杓子やお守りを無料授与する。杓子は参道途中の子持銀杏の木（階段中程の両側に二抱え程の銀杏の木が一対あって、それぞれ径八寸位の子供銀杏の木がひこばえになって生えている）に願意と名前を書いて下げて帰ることとする。心ある人は適当に賽銭もあげればよい。

これは講の運営に経費を必要とするので婦人部が子安講を守り育てる上に支障となろうとの配慮によるものである。

この講の参加者は自動的に沖、中津宮の「名寄講」（なぜこう）に移行する。名寄講というのは子供の名前をお宮にお預けして（届け出て）、その子の無事成育と一生の健康幸福をお願いする講である。こうして一連の人生儀礼を婦人部が受持って運営することになる。家庭の主婦や母親が先頭に立って中津宮さまに敬慕の幸情を捧げ、子供の幸福を思う行事に参加するならば家庭や地域社会に及ぼす好影響ははかり知れないものがある。

新春を期して大島の人心は大きく動いている。世の潮流の中に在って毅然として宗像人の道統を樹立しようとする大島敬神婦人部の動向は島民の意志を示すものといえよう。子安講の弥栄を祈る。

大島村
沖・中両宮奉賛会敬神婦人部
子安講発会

十一月廿一日　生産感謝祭、高宮祭午前九時、本社十時斎行、評議員会午前十一時社務所にて開催。

十一月十一日　生産感謝祭、高宮祭午前九時、本社十時斎行、評議員会午前十一時社務所にて開催。

十一月十二日　月次祭、高宮祭午前九時、総社祭午前十時、七五三祭午前十一時執行田島幼稚園児起工式、佐世保にて斎行。

鐘の岬（かねのみさき）

山下半可　作
深田無庵　画

今月から当分「鐘の岬」と題して小説を連載いたします。この物語りは、飽くまでも史実を参考としたフィクションであることをお断りして置きます。

「初冠（ういこうぶり）」

時は戦国、こと筑前国宗像郡の総鎮守宗像神社はその大社たる由緒によって、近隣の大友、菊池、立花、竜造寺、島津、大内等の雄藩が相せめぐ間にあって毅然としてその偉容を誇っていた。領主としての宮司宗像興氏の施策よろしきを得た為め、郡内神領の民心に動揺のなかったのがその原因といえよう。

勿論戦乱に禍日なき世の中であったから、或る時は大友氏と戦争い、又、或る時は立花氏と争い、又、時に神領保全の政策上から大内氏に臣従したりしたこともなかったではない。

が、しかし難しい世であればある程、大宮司家を中心とする領民の結束は固かった。

その頃、宗像神社の鎮まります田島の里人らの願が何ということなに明るい。それというのは、大宮司の姫君伽羅姫と粕屋郡名島の城主小早川隆景の養子五郎秀秋との間に目出度く婚約が整ったというのである。辻々の間にも大きな声に変り、はてはあちこちの人々が寄ると、ひそひそ話がいつ取り入れの作業の手を休めて人々が集まる。

つい此の間の放生会（宗像神社の秋の大祭、旧八月十三日）の時に大宮司家から発表があったとか、それを重臣の石松和泉守、吉田飛弾守らが殿の仰せをいただいて家中に伝えたのだから間違いあるまい、などという者もあって、里人たちは彼等の敬慕する大殿の御屢事をわがことのように喜び合っているのである。

×　×

当日、秀秋は先ず島のお社、志賀海神社の拝殿に於て初冠りの奉告祭を元服の儀を済ませると、この阿曇家というのは、矢張り筑前の名族で、古くから筑前志賀島水軍の棟梁の家柄であり、周囲三里の島の東北端には海（わだつみ）三神をまつる志賀海神社があって、阿曇家はその神職であり当然大宮司家でもある。島の人々にはすべて阿曇家に属し、水軍の合戦出撃や魚捞農耕に従事しながら、神社に対しては別に社人（しゃにん）の制度を設けて奉仕をしている。

それはとも角、一方、阿曇家と親交のあった宗像家にかかわる縁故により、秀秋が初冠りの田島参詣をしたことがこの物語りの発端となったのである。

接する粕屋郡名島の城主小早川隆景の養子、五郎秀秋が十五才の初冠（ういこうぶり）元服に宗像神社に参詣したことが此の物語りの始まりになるのである。

戦国の勇将小早川隆景の居城は、筑前の名島にあった。隆景の養子に五郎秀秋というのがいたが、秀秋は幼名民之助といわれた頃から生来蒲柳の質であったので、ゆくゆくは祀職にでもたすきわらせようかとの隆景の配慮によって、かねて親交のあった同郡志賀島の領主阿曇家に預けて置かれた。

大柄な身体に、白に桜ほかしの直垂を着用し、果代の祭生（うんしょう）の太力を横たえ、銀覆輪の鞍を置いた黒馬に打ち跨った秀秋の顔には明るい青年の希望が、それもどこかにまだ初々しい稚ない面影を残して輝やいていた。

途中には、田島放生会に参詣する近郷近在の人々の列が続いている。思い思いの粧いをこらしたこれらの人々が、一行の行列が近付くにつれて両側に開いた。

志賀族のがっちりした潮焼けの顔の男たちの中程に、これはまた都の貴公子と見まごうばかりの颯々しい美少年が乗っているのを見て、人々が思わず「ほうっ」と声をあげた。と思う間もなく騎馬隊は速歩の蹄音も軽く通り抜けて行く。

「どこのお方か」

「どなたの御子息さまじゃろうか」

人々が話し合っているうちに、誰がいい出したか、名島の殿様のお子じゃげな、という声が伝わった。

稔りの秋の穂穂ゆたかな宗像盆地の中央を流れる釣川の土堤道を足首も軽く北上すると、やがて宗像神社東参道の「宗像鳥居」が見え出した。社頭の幟もひらめいて見える。放生会の人出をあてこんだ露店の引き幕なども賑やかなざわめきの中に見えかくれしている。

（つづく）

許斐(このみ)三河守氏任公

四百年遠忌法会

宗像郡主丸に屹立する許斐山は宗像大宮司家の分家許斐氏の居城であったが、今年は戦国乱世の頃八並吉原の地に於て壮烈な討死を遂げた三河守氏任公の四百年忌に当るので、十二月十日菩提寺である大穂の宗生寺で盛大な法事が営まれた。氏任公の後裔で東京銀座六丁目に東京温泉株式会社を経営する許斐氏利氏が施主で、福岡市の政財界の縁故者多数をはじめ、郡内有志や宗生寺の檀信徒多数列て僧地と言える大穂の山間部落は自動車相続いて里人を驚かした程であった。当日は師走には珍しい暖かな良い天気で参列者も二百数十名、山村では稀に見る慰霊の行事であったと言えよう。

仏壇前は所狭きまで多くの献花が供えられ、定刻十時過ぎ十数名の僧侶の読経によって行事が始められ、氏利氏や許斐家一族の焼香の後参列者これに続き、終って宗像大社の久保宮司が許斐三河守を中心に許斐家の来歴と許斐城の事蹟に就いて講話をした。

許斐家は宇多天皇の皇子清氏親王が勅命に依って宗像の地に下降され、大宮司家を創立されて祀職に就かれてから、その分家として起った家筋である。後座行職を司り大宮司であり領主であった本家の輔翼となり、許斐山を居城として宗像一郡と遠賀郡手の一部を併せた領地の警備に任じた。許斐山の築城は大宮司氏平の時と云い又氏長が建長年中に築いたと伝え、明確ではないが堂々たる大規模の城郭にはなかったようである。嶮峻の要塞ではあっても山頂僅かに七八十坪の平地があるのみで、恐らく山麓に居住して緩急の際守備につた事であったであろう。今は何も残っていない。山頂には宗像大社の境外末社たる許斐神社があるのみ。

応仁の乱を転機として室町幕府の威令漸く行われぬ世相となり、乱世の兆濃くなって来た頃、極めて劣勢の兵力をもって大宮司家を守護し領地の警備に任じた許斐城主を中心とする宗像党の苦悩は大きかったに違いない。されば三河守の父氏能は明応八年十二月宗像郡田島村芦間岩ヶ崎に於て戦死し、三河守は永録三年十月郡内吉原に於て戦死、その後朔の氏賢も亦許斐城と防衛戦に討死を遂げたことによっても、宗像党の苦戦の状況や城主の任務の重大さが偲ばれる。しばく大友の大軍を迎え討ち粕屋の立花勢の進攻を防ぎ、或る時は一党敗退して大島に逃れ漁民の援助によって苦しい籠城を忍んだこともあった。已むなく周防の大内の麾下に入りその庇護をうけたが、これが大宮司家をはじめ諸将の内紛の因となり幾多の悲劇を生んでいる。三河守が僅かの家兵を率いて、大内の寵を得て許斐城を攻撃し居城を奪回のため奮戦して討死を遂げた事蹟も、当時すでに宗像党が自力で防衛が困難となり大きな勢力に頼ったことに原因があったと見られる。天正十四年優れた智略をもってよく兵馬の間に宗像大社と領地の保持に奔走した大宮司氏貞が断絶の悲運に会い、翌十五年豊臣秀吉の島津征伐を機に領地を召し上げられて名島城主となった小早川隆景の所領に加えられて後は一党離散、許斐城また荒城の月を奏でるに至ったのである。

以上が講話の大要であった。

宗生寺は曹洞宗、松巌山と号し許斐家先祖の菩提寺である。境内に三河守氏任公の墓があり、その側に石碑が建てられている。左馬頭と号し三河守と任じ永禄三年庚申十月十日京師に於て戦死、高林院宗仙大居士と号す云々の刻字が苔むした碑面に読める。因みその後方山内に小早川隆景の墓はあり、その周辺個の墓は殉死した四人の家臣を葬ると伝えられる。

四百年の星霜を経た今日、許斐山の大刀風すさび、英魂故山に松風を聞くか。

つつましき　祈りに明ける　新しき朝

わきあがる　生の歓喜

たより

新春の御祝申上げます

昨年の春献歌会が始められ、伊規須様におさそい頂き、父の郷里宗像しかも氏神様の宗像神社で行われるので、なつかしく出席して毎月の歌会を楽しみにはるばる戸畑から出かけております。

月に一度、北九州の家々、車、騒音とほこりの中から参りますと田舎の景色は本当に心の双目の保養です。車から見る自然の景色に初めて時季を知る感慨一入です。

四月には高宮にお参りして桜や菜の花のもうせんに腕が一杯でした。五月にはお宮の前の藤棚の下に入って匂いを満喫したり、六月には麦刈りも終って一面の水田となっておりましたのに、はやふさふさと黄金の波となり、釣川の土手には白いすきの穂が風にそよぎ、山には紅葉が目に泌みて、どこの観光地よりもすぐれた風景を行き帰りに楽しんでおります。

こんな所に毎日を過される方々が羨しく又長生きされるのじゃないかしらと心ひそかに思ったりしております。

歌会も月と共に多数の投稿がありますが、偏えに小野権宮司様の熱心な努力の賜と感謝しております。今年もどうぞよろしくお願い致します。

戸畑市新池町三丁目　田中ハツセ

「宗像」編輯部御中

青雲の志に笈を負うて　その一

(宗像人の心意気)

越智汎愛

一、雪中行旅

降りしきる雪が風に舞っている。その中を足を引きづって一人の旅人が歩いている。ミノの下に背負った風呂敷包みを重たげに、時々肩で雪を払う。今までに歩いて来た宗像や筑紫平野とはちがって、此処豊後の国の夜明村にさしかかると、山が深いだけにさすがに雪も深い。行き交う人もない山路である。

然し旅人の足どりは案外しっかりとして、一歩一歩、大地を踏みしめて行く。

頭にかぶったカサの雪を払うため、アゴヒモをほどいてカサを取ったその顔を見ると、おやっ！この旅人は少年である。

年のころは十五ぐらいか。それにしても、雪にほ照った童顔には、淋しさも苦しさも、それら一切をかくして、一路、夜明村に向って行く。——

×××××

この雪、この山路、この年頃の影は少しもない。紅い口びるは真一文字に固く結んでいる。澄んだ眸は歓喜に躍っているようである。

この雪、この山路、この年頃の影は少しもない。紅い口びるはたない一筆の片隅にふみしめて行くわらじの音が痛いのか、足だけは相変らず引きづって行く。——

×××××

此処は夜明村の旅人宿のうすぎたない一室の片隅である。夕餉を終ったさっきの少年が、風呂敷包みから紙とじを取り出し、うす暗い行燈の下で、不思議である。

筆を執りせっせと何かを書きつけている。

雪はしんしんと降っている。そっと、少年の帳面をのぞいてみよう。

天保六年二月三日

日田行第三日、夜明村に宿す。博多甘木を経ていよく豊後の国に入る。昨夜来の雪は益々激しく本日の雪中行路足は重く痛く難儀せしも心は軽く楽しき旅路なりき。

宿の者明朝の旅路は困難なれば一両日の滞留をすすむれど、吾れは夜明けと共に出発すべし、山を下れば已に日田盆地、足を急げば昼下りには目的の咸宜園に到達せんかと思えば、不安と希望が交々胸中を往来す……。

少年の日記は此処に終っている。

——山中の夜は雪と共にしんしんと更けてゆく。——筆をおいた少年は、ちぢかんだ手をこすり合わせて暖かくし始めた。雪中行旅の時も常に少年が口誦んでいた詩の朗吟である。

諸生に示す。広瀬淡窓

いう事をやめよ多郷苦辛多し

と　同胞友あり自ら親しむ

栞脚跳いずれば霜害の如し

君は川流をくめ吾は薪を拾わん

この少年は、広瀬淡窓先生をして咸宜園に入門する為、宗像の地から、わざく日田まで、青雲の志を抱き、笈を負って只一人雪の山野を踏み分けてとこまでやって来たのである。

明日には、いよく待望の咸宜園入門が出来るという歓喜の心をうち振わせながら、淡窓先生の諸生に示すという漢詩の朗吟を幾度もく少年はくりかえしている。

寒気もうち忘れたごとく……

……

（つづく）

（筆者は大島中学校教諭）

成人祭の駅伝はフェアーで

福間町は来月開かれる成人祭の祝賀駅伝大会の行事を取りやめて、代わりに演芸大会を決めていたが、青年団などから駅伝大会はやめないでほしいとの強い要望があって、論議のすえ、けっきょく従来どおり金町あげての駅伝が実施されることになった。征ってつづけている駅伝をなぜ中止せねばならなかったかは、開催当日に責任ある統制がとれないというのが大きな理由のようだ。郡内では福間の他にほか宗像、玄海町町も毎年盛大に行なわれているが、お祭の騒ぎになって、せっかくの趣旨から逸脱した勝手な行動があっては迷惑をかける。そのためには催者に手落ちのないよう周到な計画をたて、選手や一般を守り、フェアーにたたかって意義ある大会を飾ってほしい。（四日本新聞より）

宗像大社御用　綜合印刷
有限会社　大和印刷所
宗像郡宗像町東郷　電話東郷27番

町村往来

宗像町農業経営改善講演会　19日午後1時、河東小学校、岩片九大教授の講演、質疑応答などがある。新作教育映画研究協議会　18日午前9時半、福間町公民館同日は試写会、映画の評価、研究協議がある。出席者は各町村教育委員、小中高校長、公民館主事など。

玄海町小児マヒ予防注射　18日午後1時—同2時役場本庁　19日同岬支所、21日同池野診療所、23日午前11時—正午。

養老施設慰問　宗像町朝町婦人会（代表者井上文子さん）と同屋掛婦人会（同谷口ワメノさん）の会員は16日緑風園をたずね、白米、お菓子などを贈って慰めた

原付き自転車免許証縁上げ交付　12月の試験の結果、合格者の免許証は本月にかぎり第一、二種とも25日交付。なお合格者発表は18日宗像署で。

津屋崎町小児マヒ予防注射　18日午後1時半—同3時半役場　19日午後1時半—同3時半勝浦診療所。料金は二百七十一円。

来春完成めざして着工

岬小の防音校舎

宗像郡玄海町では岬小学校の防音校舎建築で調達庁と交渉していたが、このほど正式認可となり、十六日新校舎を入札、来年三月いっぱいで完成させる。

同校は芦屋基地が近く、ジェット機の騒音で授業が中断されたりニワトリが卵を生まなくなったなど、地元側から陳情で数年前から調達庁が現地に乗り込んで実態を調査していた。計画によると、現在の運動場をつぶして防音施設の校舎平屋一むね（六教室）を新築するほか、二十八年から三十年にかけて建築した普通教室六、特別教室六と校長室、職員室の合計十四教室を全部防音施設にする。また建築して七十年になる西側の古い校舎一むね（四教室）をこわして運動場をつくる。

宗像町青年学級商業講座　15日午後7時、宗像信用組合二階、経理、商法、簿記について講義。

釣山線林道完工式　玄海町釣山の大刀風すさび、延長五三〇メートル）は工費百五十万円で工事中だったが16日午前10時から現場で完工式を行なう。

福間町女性教室　同町女子青年団は17日午前9時から公民館で女性教室を開く。講師は米山千代子さん。

神湊小学校父親学級　17日午前9時から松尾池野小学校長の『道徳教育について』の話がある。午後1時から校区一周駅伝を行なう。

福間町成人祭駅伝運営委員会　14日午前10時、公民館、同午後2時から監督会議を開く。

宗像神社鎮火祭　15日午前9時から町村長、町村消防団幹部が参列して火事がないよう祈願する

宗像町婦人講座　13日午前10時吉武△同午後2時赤間△20日午前10時河東△同午後2時東郷▽22日午前10時南郷。主催は町公民館。

学校保健関係者講習会　13日午後1時半、河東小学校。井戸水の管理』『試薬の作りかたと滅菌器の管理』などについて宗像保健所係員が指導。出席者は学校医、校長、保健主事、養護教諭など。

神興農協婦人部役員会　13日午後1時、同農協で。

宗像伝説　その十二

禍転(わざわい)じて福となる

今は昔、宗像は深田の里にとても仲のよい嫁と姑がありました。お嫁さんの名はおとらさんと申しまして気立てがまことにやさしく、村中の評判になっておりました。屋は姑につかえ夜は夫に従うて、そうしてからに家を立派におさめるので婦人の鑑とよわね人とであります。ところが何のはずみやら、月にむら叢花に風、ふとしたことから仲違い、嫁と姑の溝深く、それから後はことごとに、いさかいばかりする有様。日毎夜毎にいじめられ、嫁はすっかり痩せ衰えて、人の見る目も哀れになり。嫁も姑も心のうちに、腹立つ情ないやらで悶々の日を送るばかり。

元はこんなでなかったに、こんな私でなかった。思いはすれどままならぬ。相も変らず仲違い、狂わんばかりの日常が、ますますつのる一方で、今はどちらか片方が、生きるか死ぬかの騒ぎです。

嫁が考えた。どうせこのままでも仕様がない。姑をなきものにすれば何とかなろう。あさはかな女の智慧です。しかし人間狂うと何をするかわかりません。今の世の中だって同じことです。

一生一度の覚悟をきめて嫁は医者の門をくぐりました。

「先生、うちのお〻母さんに一服盛ってつかあさい」

医者が驚いた。噂には聞いていたがまさかと信じ難いとは思っていなかったからです。よくく事情をききただしました。

「よろしい。盛ってあげましょう。これは余程はげしい薬じゃけんそのつもりでな。一度のんだら必ず三七日がうちに死ぬ。わかるといかんから、薬をのませたら二十一日の間はやさしく介抱しなされや。こちらへおいでなされ」

奥まった部屋に嫁さんを案内ずるとびったりと襖をしめました。

「先生、あの毒の消える薬を下さい。おっ母さんを助けて」

かけつけて来た嫁さんを見て医者が笑い出しました。

「あれはただの白い粉じゃ。心配は要らん。人の真心というものは世の中で一番大事なものじゃということがおわかりかな」

嫁さんの目から嬉し涙がこぼれました。医は術の一席（T）

医者と嫁さんと二人きりです。そこで医者がぐっと膝を乗り出して嫁さんの手をつかみました。

「よいかな、よくくわしのいうことをききなさい。この薬をのませたら最早姑さんの命はない。さっきもいった通り、姑さんが死ぬまでの二十一日間は夜の目も寝ずにおつかえなさい。すぐに死ぬのではのうて日が経ってから利き目があらわれるのじゃけん。人にあやしまれることもなか」

薬包を渡す手にぐっと力が入りました。

嫁は、薬は手に入れたものの嬉しいやらこわいやら、おそるおそる家に帰りました。姑は姑で連日の戦いに疲れはてて寝ております。そこへ帰って来た嫁のおとらが今日は珍らしく機嫌がよいので、姑も一寸嬉しくなりました。

「おっ母さん、暖かい飲み物をさし上げましょう」

いつになく嫁がサービスしてくれるほうにかいお茶ものどにしみ通るようにおいしくのみました。

これが例の薬だったのです。

それからというものは嫁の態度がガラリと変りました。かゆい所に手の届くように世話をします。姑は今はもう薬隠居にでもなったような気分で、此の間までの角突き合いなどケロリと忘れたようになりました。

嫁もみせかけのサービスがいつの間にか本気になってしまったのです。二十一日目が明日という日、嫁の心が落ちつきません。いても立ってもいられません。今になって姑に死んで貰いたくなったのです。

「先生、あの毒の消える薬を下さいかけつけて来た嫁さんを見て医者が笑い出しました。

「あれはただの白い粉じゃ。心配は要らん。人の真心というものは世の中で一番大事なものじゃということがおわかりかな」

嫁さんの目から嬉し涙がこぼれました。医は術の一席（T）

物質文明より人間尊重へ（その二）

宗像生

（前月につづく）

ところが、それとは反対に、日本には物事を静かに考え、そして簡単に片付けるという伝統がある。これが日本人の簡素静寂を尊ぶ思想であり、不言実行の特長である。その最も代表的なものが、茶道であり、生花である。この茶道とか生花というようなものを通して、アメリカ人は日本の特長を知り、日本を賞美しておるという感じを持った。これもアメリカ人が独特の長所たる国民的唱導力を示しているものと感じた。

こうして私がアメリカ人に対して、君の国は物質文明に行き詰まっておるじゃないかと言ったのに対しては、何を言っておるかという有様で、てんで相手にされませんでした。

第二回の旅行――訪欧（昭和三十三年）

それから三年経って、即ち今から三年前にイランの皇帝に挨拶に行ったついでに、スイス、パリ、ロンドンを訪ねたのである。ロンドンに行った時に、私はどういわけか非常に優遇を受けたので、出迎えに来た英国人は驚き、日本の商社の人々は非常に喜んだのである。そのくらい私は優遇を受けたが、他の日本の商社の人々の話では、実に英国人はひどい、反日思想が非常にはげしい、日本の商社が店を出すにしてもなかなか許可しない、旅行者として三カ月滞在を許して、それから更に六カ月を許可するというようなことをして、非常な反日であり不愉快でしょうがないということを言っていた。それからパリ、スイス等では、国民大衆は日本に対する認識は非常に浅いというのがヨーロッパの大体の趨勢でありました。

第三回の旅行――訪米（昭和三十四年）

それから一年経って、即ち今から三年前に私はアメリカに二度目の旅行をしたが、その時には驚いたことに、私がロスアンゼルスに着くと同時に、バンク・オブ・アメリカの重役である支店長が私と会うなり、「出光、物質文明は行き詰まった」ということを向うから自発的に言い出した。偉か四年前には私が物質文明は行き詰まっているではないかと言ったのに対して、見向きもしなかったところのアメリカ人が、僅か四年後には自ら物質文明の行き詰まりを告白しておる。それから各地を歩いて同じことを聞いたのである。

それ以外に、鈴木大拙先生の紹介によって思想家、宗教家の多くの人と会ったが、この人達が又大体同じことを言う。われわれは生活安定し、物質にも恵まれておるけれども心に空虚を感ずる、心の世界がとほしい、というようなことを言って、反対に人間性を探しておるのである。そして日本アームが至るところに起っているゆえんもそこにあると思ったわけである。それが今から二年前であります。

第四回の旅行――訪欧米（去年）

それから去年の旅行が四回目であるが、アメリカに行った時には、これはもうアメリカの物質文明どうもの話は完全に行き詰まっておって、人間が無味乾燥という感じを私は持ったのである。と同時にアメリカ人の日本認識はいよいよ深くなり、日本がしっかりしてくれなければ東洋の平和はない、東洋の平和がなければ世界の平和はない、どうか日本しっかりしてくれという。これがアメリカ人の最近の常識となっている。日本に対して非常な期待を持っている。アメリカ人は世界でどこに行きたいかと聞けば、日本に行きたいというのが常識だそうである。それくらいに日本というものを二、三年の間に見直しておる。

それからヨーロッパに渡ってまずロンドンに行ったが、ここで驚いたのは三年前あれ程反日のはげしかったロンドンで、もはや反日の空気はなく、反対に非常な親日の態度であり、更に進んで日本に非常な期待を持つようになっている。日本しっかりしてくれ、と望むもの、アメリカと同じで東洋の平和は日本によって保たれる、というのが英国の声となっておる。それからフランスその他の国に行っても、今まで日本という国に対する認識は非常に浅かったのが、これも日本という国は偉い国だ、これがしっかりしてもらわなければならないというのがやはり常識になっておる。このように英国を始め、欧州各国の日本に対する認識は非常に深くなっておる事を認識しました。

四回の海外旅行の結論

私は、欧米各国到るところで、世界は混乱し行き詰まっておるかと聞いてみると、行き詰まっておると答える。次に解決の方法を持っておるかと聞くと、いやない、当分解決の見通しはつかないというのが常識である。この行き詰まった全人類は言い合わせたように、ヒューマニズムを唱え始めた、人間性の尊いことに気がついた。この混乱を救うものは人間そのものであり、お互いの心の結び合いであることがわかった。これが世界の常識となった。私共、事業経営に身を置くものからみても、アメリカ或はイギリス等の経営学者が事業経営学にヒューマニズム、ヒューマン・リレーションを盛んに言い出したことが目だってきた。

世界は混乱し、行き詰まり、解決の方法さえも見出せないという事実、次にその行き詰まった人類が盛んに人間性を唱え出した事実、そこで日本が認識され日本人の姿が強く浮かび出て来たという、この三つの現実の姿を日本人は如何に見るべきか。この人間性が世界的に言い出されていることと、日本が世界的に強く認識されて来たということ、この二つのことは相互に関連性を持って一つの根源から出ておると思うのであります。いわゆる自分が行き詰まってそれを解決するのは人間性であり、それを持っておるのが日本であるということを、おぼろげに彼等が認識していると言わなければならない思うのである。しかしながら日本人の持っている人間性が無我無私であって、その無私の実際の姿がどんなものであるかを忘れた結果、大きな行き詰まりを来たし、人間へあこがれつつある。しかしながらこの人間尊重へ達する道が見つからないで、非常に苦悩し、混乱しておるという見方をしなければならないと思います。

二、世界の行き詰まりを打開する道

個人主義の行き詰まりを理解し、知ることは、これと反対の個人主義、物質尊重の中に育って来た人々には極めて辛難のことであり、浅い見方や皮相な考えを以てすれば、権利の放棄とも罪悪とも邪道とも見えるであろうと思われるのである。

これを要約すれば、世界は行き詰まった結果、物質尊重から人間尊重へ、移らんとして非常に悩んでいるということなのである。余りに物質文明に偏り過ぎて人間を忘れ、人間の心や精神というものを忘れた結果、大きな行き詰まりを来たしつつある。

さきほども述べましたように、弥生時代末期（三世紀の前半ごろ）までは、大和朝廷の勢力はまだ、宗像地方にも及んでいなかったでしょう。そのころは、宗像人は出雲人と組んで、ヤマトの女王国を中心とする連邦と並立していわゆる海北道中による自主的な、海上活動をつづけていたことでしょう。

先年来、沖ノ島から収集され、田島に移されましたおびただしい神宝の類は、ほとんど古墳時代中期から末期、四世紀の半ごろから六世紀末によぶ、全期間にわたるものであるとされています。

私どもの上古史に対する自安では、宗像地方を含めて、わが郷土の筑紫地方が、朝廷の支配下に入りましたのは、ちょうどこの四世紀のはじめか半ばごろのことであったであろうと思うのです。

皇別は筑紫地方を支配するために、筑紫（狭い意味での）の地に、おそらくは、古墳の示すとおり、皇室の国造を置かれたことでしょう。そして、この筑紫の国造は、かってのエ者でありましたヤマトの女王に代って、倭人伝に見える女王の勢力圏を支配したものであろうと思われます。そしてです。その際に、皆様の宗像地方は、大神のゆえに、海北道中の重要なるがゆえに、この筑紫の国造の支配下からは外されて、独自の地位にあることを許されたものであろうと考えられます。

このような四世紀の末期、五世紀の初頭に、まさに、今日の歴史的遺恨をらいたしますと、応神天皇の御代にあたっているのです。

○

中国の史書によりますと、五世紀のころ、わが国から五人の王様が、中国の天子に使を送り、文物の伝来とともに、わが国が半島諸国の上に立つものであることを称号の上に認めてもらいたいと申し出たことが知られます。その五人の王様が、どなたであったかとなるとなかなか多少の異論がありますが、大体において、応神天皇の次つぎである仁徳天皇、それから反正天皇、允恭天皇、安康天皇、雄略天皇などの方々であるとされています。

民はその生命財産の安全に対して永久に安心して頼る者がない。止むを得ず己れを頼るの外はないことなり、個人主義は起り個人の権利、自由の確保に向って進み、更に物質に頼る物質尊重の思想となる。これがやがては間の勝手な性格によって対立闘争の世相となるのである。これが個人主義、物質尊重の歴史ともいうべきものであろう。

この歴史の必然の結果として生まれた個人主義というのは、本来は非常に立派なものであるべきである。主義主張というものは、真面目な学者なり正義の人が真剣なる研究の結果、主張している立派なものである。個人主義の目指すところも尊重すべき個人をつくり、そしてその個人が立派な個人として存在するために、人として尊重すべき人々であるならば、これら尊重すべき人々によってはじめて人権、自由は正しく用いられ、立派な理想的の社会ができるというものは実に立派なのであるということになるわけである。

しかしながら、この主義を実行するのは人間である。ここに問題がでてくる。というのは人間は矛盾性をもっているからである。人間が自分を離れて、東洋的いうも無私の姿で考えた主義、更にこれを口にする場合の主張は実に立派であり、理想的である。しかしながら、一旦自己にとられ利害と関連を持つ場合は、この行動は全然違ったものとなり、言行不一致となるのが世間一般の常識である。

今ここで一々説明するまもないが、例えば、多くの議場において公平な立派な主義主張を述べる人々も実行がとれに伴わず、国際連合会議場、国会、地方の議会、日常における一般社会人の行動等々、その実例は余りに多きに過ぎるのである。こうした人間の矛盾性のために、立派な個人主義もエゴイズムとなり、利己主義となり、あるいは人権を守るという本質から逸脱して人権を主張して横暴を押し、自分のわがままを通して他人の人権を侵すことになる。

（以下次号）

宗像に憶う

筑紫豊

沖ノ島の神宝は、このような、皇室の一大活動期のものから、六世紀末、やがて聖徳太子がお現われになるころまでの二百数十年にわたる時代の、すばらしい工芸の粋をこらしたものなのであります。

宗像人が、この神宝に驚嘆随喜されるのも故なしとはいたしません。さきに刊行されました『沖ノ島』『続沖ノ島』の二冊が、いろいろな角度から、その優秀性を説きあかしているのです。宗像人よ。これらの書物を是非一度は手にとってお読みください。

○

ところで、私、思いますのは、筑紫地方、筑紫の国造は、六世紀の半ばすこし前に、大事件を惹起いたしております。それは、継体天皇のとき、朝廷が、新継位後の軍隊をさしむけるために、遣わされた将軍を国造の磐井がさえぎり、国造のもっている軍隊を動かすことをこばんだのです。そこで、朝廷は、物部の鹿火（アラカヒ）を遣して、磐井を討伐させられました。長いあいだの戦争の末、三井の野（久留米附近）で決戦をなし、ついに磐井は敗死し、磐井の天皇のとき、朝廷が、新継位後の軍隊をさしむけるために、遣わされた将軍を国造の磐井がさえぎり、国造のもっている軍隊を動かすことをこばんだのです。そこで、朝廷は、物部の鹿火（アラカヒ）を遣して、磐井を討伐させられました。長いあいだの戦争の末、三井の野（久留米附近）で決戦をなし、ついに磐井は敗死し、磐井の昼子の葛子は糟屋の領地を奉って、やっと死罪をまぬがれたのです。これが、筑紫地方の、貴国の地方、肥の地方をも動員したというのですが、そのようなとき、宗像人の立場はどうであったのでしょうか。もしこのとき、磐井の一味になっていたとしましたら、朝廷の沖ノ島すなはち海北道中に対する尊重心は、あるいは断絶していたかもしれません。それが、沖ノ島の神宝に関する限り、そのような形跡がないように思われるのです。

この辺が、やがて、神郡の神郡たる所以ではないかと思うのです。宗像人が、朝廷の勢力の北部九州の古墳時代の全時代を通じて、皇室の崇敬と密接に結びついてきた事実を証明するものが、沖ノ島のおびただしいそれです。

○

私がはじめて、沖ノ島に参りましたのは、昭和二年の夏、私が数え年二十四才未だ学生のときであります。宮司は幡掛さん、知事は斎藤氏でありまして、一行は、沖ノ島築港計画に関する視察を目的とする神詣りでありました。当時、私の伯父壹津耕次郎は、熱心な築港開設論者で、大神の御神徳発揚には、是非ともその必要があることを力説いたしました。

話が一べんに飛躍いたしますが、これは、今日、お役所仕事でやっております沖ノ島築港とは、その精神が根本的に異っているのです。それは、時勢の変化ということも、大きく関係いたしておりましょうが、伯父たちの思い立ちは、神様に対して全責任をもつという立場でありますから、事と次第によっては命がけというほどに真剣なものでした。

伯父のことを、賞めたような口ぶりで述べますことは、多少の憚りを感じはしますけれども、事実、そのとおりでありまして、殁後その遺髪を沖ノ島の港のあたりに埋めさせましたというのも、その根性からでありました。

このようなことを思いますと、宗像神社復興期成会が、多大の費用と学究陣とをもって沖ノ島発掘現場（遺跡ではありません）の神宝の調査収集をなしとげられましたことの、時にとっての功績を、私たちは、大きく正しく評価するとともに、他面また、神宝とともにいますとのできなくなった沖ノ島の大神の御心を、宗像人が、どのようにして慰めくださるか、そのことについては私、強い関心をもっているのです。二〇世紀の今日どんな神宝が神意に叶うのやら、またどんな施設が、そのような神宝の安置場所として適切なのやら、期成会の方々がお考えくださっ、実行してくだされたことは、このようなところにも、重大なものがあるように思われるのです。

○

私は、微職ながら、県下の文化財の保護にあたる仕事に従事しています。そのお陰をもって、田島附近から奴山附近、それから宮地嶽にかけての古墳地帯を歩きまわり、宮地嶽の古墳関係の、出土品で、国宝中の国宝と尊重される御社宝を拝見したり、世にも稀な、興福寺の色定法師一筆一切経を拝見したりして、宗像神社にまつわる宝物の数々とともに、それらの文化財のもっている無限の価値に、つねづね感激を深める機縁に恵まれているのですが、文化財は、その宝であると民俗資料であるとを問わず、適切な施設内に保存され、適当な方法で、公開され、それが、文化的な人間の陶冶に役立つところに、文化財としての真意義があると思うのです。

この点、神社と寺院とが、宗像一円という地域社会の協力のもとに、打って一丸となって、貴重な文化財の收蔵庫建設を計画され、地元出身の出光佐三氏の絶大な援助と、国、県の補助により、来年度において堅牢清新な宝殿の出現を期しておられることは、まことに感服にたえない美挙というべきであります。

○

よほど注意して書いていたのですが、ついつい、むつかしい話になってしまいました。宗像人よ。どうかお許しください。

私は、いま近く出版されることになっています、拙著『九州万葉散歩』のことを思っています。この小著には、金の御埼のこと、名児山のこと、それから宗像文化のこと、宗像の君徳善のこと、その女であるの尼子娘（アマコノオトメ）のこと、この娘を妃とされた天武天皇や、このお二人のいだの御子であられる高市皇子（タケチノミコ）のことなどについても、かなり書きしるしています。宗像人よ。小著が刊行されましたならば、これまた御一読くださるようお願いします。

本誌の第四号によりますと、目下宗像神社の境内に、万葉歌碑を建てになる計画がすすめられているということです。まことに結構なこと有難いことです。発起人の方々も信頼のおける方々ばかりです。かならずや、よい歌碑を、よい場所にお建てくだされることと思いますが、くれぐれもお願いいたしておきたいことは、金の御埼そのもの、名児山そのものの顕彰を併せ行って欲しいということです。ここに、名児山などは、奴山から帆船を巡って、この山のなごやかな姿を目のあたりにして、さて一休みして、それから田島の方へ下ってゆくいった古道との関連において、この山を、万葉を愛する人々のために、うまく紹介していただきたく思うのです。

○

私は、よく船で志賀島に渡ります。そして、いつもいうことです。「信仰の島、歴史の島、文学の島、わが志賀の島」と。宗像もまた、宗像人の皆様にとっては「信仰の郷土、歴史の郷土、文学の郷土、わが宗像は」であろうと思います。

このたびは、私ごときが、神社の御指名とはいえ、このような拙稿を草上いたし貴重な誌上を汚すことになってしまいました。多士済々の宗像人に対して、まことに失礼をいたしたと綴り終ってしきりに恐縮に存じております。しかしながら、機会を与えられましたことどもの一端を、率直に申し述べることができました。他山の石として、御適当に御取捨くだされば、望外のしあわせに存じます。（完）

筆者は県社教勤務